

徳川みらい学会第2回講演会



「仏像から考察する徳川時代」

東京藝術大学大学院教授 藪内佐斗司氏



修復文書からの新たな発見

徳川みらい学会の通常総会・第2回講演会を5月10日(土)、静岡市民文化会館で開催しました。講演会の講師は東京藝術大学大学院教授の藪内佐斗司氏。町人文化が花開いた徳川時代に制作された仏像から、当時の文化について語っていただきました。

内側に墨書きされていることも多々あつて、修復の事情とともに、当時の人々の思いもよく伝わってきます。

次代に残すための修理方法

徳川時代の仏像は、多くの場合、民間がお金を出していることから贅沢な材料は使っていません。修復材料も、檜だけでなく、杉や広葉樹も多用しています。また特徴としては、数十年に一度大きな修理を必要とするため、わざわざ脆弱な処置を施していることです。これは、材料の節約以外に、敢えて耐用年数を短縮し、また解体しやすくすることで、自分の次の世代の仕事を残すための徳川時代ならではの知恵ではなかったかと思われま

す。多くは、元禄時代に再建されたものです。また当時は京都にも大仏があり、現在は「大仏前交番」という交差点となつている所の方広寺にありました。他にも度重なる災難に見舞われ、今ではお顔だけとなつた上野公園内の大仏も、徳川時代に盛んに修復されました。このように徳川時代も、仏像に対する人々の情熱は並大抵のものではなく、数多く修復されてきました。

徳川時代と仏像修復

日本の仏像彫刻史において、研究対象となるのは鎌倉時代、せいぜい南北朝時代までとよく言われていますが、徳川時代にも目を惹く仏像はたくさんあります。注目すべきことは、元禄時代を中心に、古い仏像の修理が大変熱心に行われたことです。造られた時代は平安時代や鎌倉時代であっても、徳川時代に大規模な修理が行われている像が多くあります。そして、修復を支えた人たちの名前を記した願文や銘文が発見されたり、像の

徳川時代の人々は大きな仏さまが好きでした。天平時代に創建された奈良の東大寺の伽藍(建物)の

徳川時代は大仏ブーム



・上野公園の大仏:「これ以上落ちない」ということから、今では合格祈願の大仏として親しまれている

仏像の修復をしていると、体内文書や銘記を発見し、制作年代や関係者の名前が新たにわかることがあります。過去に修復した仏像では、体内の巻物の内容から、盗難にあつたものと判明し、無事元のお寺にお返しすることができたこともありました。

修復文書を読み解くことで、徳川時代は「寺請け制度」「檀家制度」のもとに、各地域の寺院が地域社会の中心にあり、仏像がとても大切にされていたことや、その修復には、地域の人たちが貧富を問わず、皆で参加していたことがうかがえます。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。  
 〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)